

米政回覧実記

第98巻 ベンガル湾の旅

2010年11月11日

桑名 正行

1. 使節団の日程:1873.8.12～8.17

・ベンガル(Bengal)……現在のバングラデッシュ共和国とインドの西ベンガル州からなる。インド最大の綿・綿製品の産地、また内陸からのアヘン(鴉片)、インジゴ(藍)、硝石の集散地であった。(→梅棹忠夫・江上波夫編「世界歴史大辞典」教育出版センター(以後本文では「大辞典」と略称)「ベンガル」参照)

2. 航程:

○セイロンの山々

8月12日 晴。朝6時半、ゴール港を出港、セイロンの南海岸沿いに航行。気温27℃。夕刻、空気は湿気を帯びて風和らぐ。セイロン島南岸、海上から眺めると蛇や竜がうねるように山脈が走り、木々は濃緑の塊となり…、この島はどこもこのような風景。<如此キ地形ハ、世界中ニ、別ニ比類ナシト云、>。

わが国の文人は、中国画の皴法を用いて日本の山を描き、それが風雅としているが、日本の山の本当の姿は大和絵がまさる。<世開明ニ赴ケハ、画モ亦精美ニツク、其漫然ニナスヘカラザル、此ニテ察スヘシ、>——久米邦武の絵画論の一端。

8月13日 朝晴。進行距離335海里。気温28℃。<夕ニ陰、夜ニ入テ風浪起ル、洋中ミル所ナシ、>

8月14日 曇。進行距離290海里。気温29.5℃。<午後ニ雨来リ暑気ヲ払フ、洋中ミル所ナシ、今日ノ航程ヲ榜葛刺海ノ中央トス、此海ノ北浜ニ要港アリ「カルカタ」ト云、印度ニテ肝要ノ港ナレハ、此ニ其大略ヲ附記スヘシ、>

○カルカッタ市略記——日本の貿易の目の付け所

<今ヨリ二百年以前ニ、葡萄牙人ハ榜葛刺府ニ拠リ、英人ハ此「カルカタ」ニ拠リテ、

互ニ印度交易ノ利ヲ競ヒ、其頃ニハ葡萄牙盛ニシテ、英ハ微ナリ、…然ルニ英国ノ勢ヒ、次第ニ隆盛シ、…今「カルカタ」、人口五十万ニスク、印度ノ首府タリ、英ヨリ派出ノ「ガハナル」(知事)此ニオル、>。

・久米は“ウィリアムス要塞”をはじめ、カルカッタ市内の構成をかなり詳しく記述している。使節団の「アヴァ号」は、カルカッタには立寄っていないにもかかわらず、…東方ヨリ、始メテ至ルモノハ、目ヲ甜ラサルナシ、大抵欧州風ノ建築ニテ錯ユルニ、亜細亜風ヲ以テス、…>とか<…処々ニ遊苑花園アリ、椰子、棕櫚樹、芭蕉ノ類ヨリ、スヘテ熱帯地方ノ花卉ヲウエ…>とか、そしてついに爛漫トシテ終年芳菲シ、花媚ヒ葉秀テ、天宮極楽界ノ想ヒヲナス、>とまで記述したのは、ご愛嬌である。おそらくパンフレット(案内書)の引き写しか、あるいは図絵を観て、無理なく「天宮様乗界」を空想したか…。

(「カルカッタ」の現行解説は→大辞典「カルカッタ」参照)

・<此府ヨリ輸出ノ産物ハ、鴉片ヲ魁トス、皆支那ニ輸送ス、支那国ハ、全地ノ民、周年ノ労カヲ傾ケ、此一品ヲ買得テ、精神ヲ麻痺スルコトニ勉強スト謂フヘシ、英国モ亦此不祥ナル利益ヲ受ケテ、自ラ肥ル、豈ニ文明ノ本意ナランヤ、蓋積習ノ後、支那へ買者ヲ制スル能ハス、英国モ売者ヲ禁スルヲ得サルナリ、>。この一文は、いわゆる「アヘン貿易」「アヘン戦争」の本源をズバリ言い当てているといっても過言でない。

(「アヘン戦争」の詳細については、大辞典「アヘン戦争」参照)

○十八世紀の末葉来、イギリス、インド、中国のあいだには、イギリスが植民地のインドに木綿製品を、インドがベンガル産のアヘンを中国に、中国がイギリスに茶をそれぞれ輸出する三角貿易が行われていた。イギリスの対中国アヘン貿易の意図は、直接的には、銀を対貨としない茶貿易を確立することにあつたが、同時にイギリスには、自国の木綿製品など工業製品の販路として、中国市場を開拓したいという強烈な意図があつた。

・『実記』は、アヘンに続けて、カルカッタよりの輸出品として、タバコ、砂糖、インディゴ(藍)、麻、綿花、絹糸、アッサム茶を挙げ、輸入品として、麻織物、鋳物、書籍、蒸留酒、毛織物、木綿製品、絹織物など、多くは工業製品であり、英国からの輸入が最も多い、と記している。『実記』が寄港地でもないカルカッタについて詳しく記しているのは、明らかに貿易に対する関心からである。

ここで注目したいのは、さきに三角貿易の一角として、“イギリスが植民地のインドに木綿製品を、”という意味、である。実はインドは、十八世紀には既にかなり高度の木綿(毛織物)製造技術を有しており、工業化が進行中であつた。イギリスは、

課税操作などを通じ、インドを綿花(原料)の生産国・提供者とし、綿製品は、イギリスより輸入する、すなわち販路としてのインド市場に変容させられた、という歴史的事実がある。そう云えば、使節団一行は、さきにイギリスはマンチェスターで綿紡績工場の盛業を目撃している。

・『実記』は、ついで忠告と期待の弁を次のように記している。曰く、「それらのものの原料は、カルカッタ、シンガポール、オーストラリア、フィリピンなどから欧州に送られ、そこで加工されたものが多い。いま、日本人は西洋人の手で導かれて海外に出る糸口を開かれ、争って欧州に行くが、その視野からはインドや南洋は脱落してしまっている。国民が貿易や工業を盛んにしようとする場合、欧州への道筋のまだ半ばの地域に、非常に多くの潜在的な利益が転がっているということについて、日本人はとりわけ無知である。……今後西洋視察を目指す人々の中から、シンガポール、カルカッタ、ボンベイなどに赴く人がどんどん増え、それらの土地の地理や物産をこの『米欧国覧実記』のような立場で記録するものが数多く現れれば、はじめて日本が富み栄えることが実現するであろう。それを期待してここにカルカッタ、ボンベイの両都市の概要を述べ、そうした記録を早く作る人の出現を待ちたい。」——

当時としては、まことに鋭い久米個人の観察にもとづく卓見と申すべきで、私見によれば、この「帰航日程」に見るような記録(旅行記にしる、体験録にしる)は、以後とも現われていないような気がする。ついでに、私見を述べると、当時(明治・大正にかけ)船旅は、概して西行き(→上海、香港、シンガポール、セイロン…スエズ、地中海)であった。岩倉使節団が東行き(→米国→イギリス、欧州大陸→地中海・アデン・セイロン、シンガポール、香港、上海)であったことが、「米・欧」の知見を身につけたあとでの「帰航日程」のユニークな実録に結実したものであって、『実記』が、俗にエンサイクロペジックと称される一因ともなっている、と思われる。

○アチェ首長国とオランダの交戦——欧州人の東南アジアへの暴戻

8月15日 晴。進行距離 256 海里。気温 26.5℃。〈晚来又陰ル、此日午後ヨリ、

蘇莫苔刺ノ海浜ニ入テ、^{シモダラ}マラッカ^{マラッカ}ヲ駛ル、〉

『実記』はここでスマトラ島(世界第6位の島)の地勢、Fauna(動物相)、Flora(植物相)などあらゆる分野の詳細を記述する。さながら「スマトラ島案内記」。(大辞典「スマトラ島」参照)。

※東インド会社——イギリス東インド会社〔E.I.C〕はオランダ東インド会社〔V.O.C〕より2年早い1600年に設立されたが、東南アジアへの進出はかなりおくれた。オランダは1619年にバタヴィアを、1641年にはポルトガルからマラッカを奪い、東洋貿易に重要な基地を築いていた。その間イギリスは、インドの植民地経営に忙殺され、中国や東南アジア貿易の魅力を十分に知りながらも、進出には二の足を踏んでいた。この間隙をぬって活躍するのが冒険者の民間貿易商人(カントリートレーダー)たちである。もっとも、19世紀になると英・蘭とも植民地経営は、本国の直轄とされた。

○アチェ戦争……アチェ首長国(スマトラ島西北1/3を占める)は、イスラムの純粋性を誇る国家で、オランダ東インド会社の支配、また、オランダに対する反感が強く、トルコ・アメリカ・イタリアと秘密に外交接触を行う。一方、列強の介入を恐れるオランダは、1873年3月、アチェ首長国に対して宣戦布告し戦争が始まった。これがアチェ戦争で、オランダがインドネシアにおいて最も苦しめられた抵抗運動であった。アチェの領主層はスルタンを奉じて戦い、オランダの将軍ケーレルは戦死した。(なんと、このケーレルの後任総司令官ファン・ウィーテン将軍の一行と、岩倉使節団の一行が、偶然、「アヴァ号」に乗り合わせたのである。これは歴史的奇遇であり、アチェ戦争勃発からむ『実記』の記述は、その時、現在進行中であった植民地制圧戦争のヒトコマとして、生氣あるドキュメンタリーになっている。)

・現に「アヴァ号」上から久米らが目撃したアチェ戦争発端の事例として、『実記』は次のように記している。

イ)“現に一隻の軍艦はアチェの港口にあつて封鎖しようとしているのを見た。”

ロ)“またわれわれの船に先行して二隻の軍艦がアチェに向かっていたが、そのうちの一隻は紅海で座礁し、またもう一隻はアラビア海で大風にあつて舵を損傷、乗組みの兵員はアデンに上陸した。その兵士をわれわれのアヴァ号でシンガポールまで輸送するというので、急いで航行したのであつたが、別の便がすでにあり、アデンにはもう一人もオランダ兵はいなかったのである。座礁したという軍艦は、われわれが紅海を走っている時、左の海上に見えた。オランダにとってこの軍事行動は大きな失費であらう。”

・ここで久米がロンドンの新聞記事を引きながら、さらに問題にしているのは、スマトラの植民地支配を望むオランダが軍艦を派遣してアチェを幾度か攻撃するが、その都度勇敢なアチェ人に追いかえされるエピソードを述べ、この戦いがトルコ、イギリス、ドイツなどの列強の注目するところとなっていることを記している部分である。

- ついで久米はく弱ノ肉ハ、強ノ食、欧州人遠航ノ業起リシヨリ、熱帯ノ弱国、ミナ其争ヒ喰ウ所トナリテ、……>以下、自説を展開している。要約は難しいが、例えば次のようなくだりがある。

“欧州ではごく当たり前とされるような、まあまあ品のいい行動をとる人が、こういう連中（ガサツなタイプ）の中にとると、実に奥ゆかしい紳士のように見えるのである。遠くまで乗り出して東洋南洋で暴利を得て生活しているものは、たぶんその多くが本国では、こざかしい連中であって、無頼な行動が故郷に容れられず、はみ出し者となってしまうたり、あるいは、刑法に触れたりして社会での立場を失ってしまったものが、国を出て、外国で一旗揚げようと考えた連中なのであろう。……”

○マラッカ海峡風景

8月16日 <朝、細雨霏霏トシテ滴リ、海面ハ風全ク絶テ、淪漪ヲタタム、……>
進行距離 264 海里。気温 27.5℃。午後5時50分に日が没した。この朝、スマトラ帯、延々たる山脈が湿気を帯びて…白雲が峰々の間にかかって…海上からの眺めが美しい。…夜には四方で稲光が走って海面が白く見えた。北斗七星は地平線に低くかかり、南半球の星空を見た。

8月17日 <晴、風尚和ナリ、…進行 235 海里、温度 27℃>午後6時にマラッカ海岸に停泊し、翌朝早く出発してまもなくシンガポール港に到着した。（マレー半島の西海岸に港が二つある。その一つがペナンで、英国の定期船でカルカット・セイロン航路の船は、ペナンによく停泊する。もう一つがマラッカである。「アヴァ号」は仏定期船ゆえマラッカ寄港。

（マラッカ→大辞典「マラッカ王国、マラッカ海峡。 ペナン→本文 p7(4 [カ]参照)

3. ネルー著『父が子に語る世界歴史3』大沢聡訳・みすず書房より3項目 (原題: Glimpses of World History)

- ① (pp228-237) 「東南アジア」 大航海時代以降、20世紀にいたるまでの列強(ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、アメリカ)の「東南アジア分割」の歴史を平易に詳述。
- ②(pp228-237, 140-148) 「インド手工業の破滅」 インドは18世紀にいたるまで、自前の手工業としての織物工業を有していたが、イギリスが本国の機械工業、紡績業を政策的に発展させるために、植民地インドを専ら原料綿花の供給者たらしめ、綿製品はイギリスより輸入する立場に追い込まれた。

- ③ (pp187-197) 「アヘンの押売り」 イギリス、インド、中国それぞれの国情、時代背景などとの関連を具体的に詳述する。

※上記3項目は、ネルーというインド人政治家・歴史学者の目で見たと、もっとも身近に起った事件・事象の詳述である。全6巻、196項目から3項目を選んだ。

4. ベンガル湾を渡った日本の文人たち——日記、紀行文、自叙伝など——

ア) 成島柳北 「航西日乗」(『幕末維新パリ見聞記』 岩波文庫) (→pp23-26)

明治5(1872)年10月1日～7日、当時35歳。

岩倉使節団と同時期パリに滞在。一私人としてフランス・イタリア・イギリス三国を歴訪。本願寺東派現如上人訪欧に随行。

イ) 森鷗外 「航西日記」(『鷗外全集 第35巻』 岩波書店) (→pp69-70)

明治17年9月9日～17日、22歳。

衛生制度の調査及び軍陣衛生学研究のため、陸軍省よりドイツ留学を命ぜられ17年8月に出発。21年帰国。

ウ) 平岡敏夫編・夏目漱石 『漱石日記』(岩波文庫) (→pp11-14, pp15-18)

明治33年月24日～30日、34歳。

33年文部省留学生としてロンドンに出向き「文学論」に取り組む。36年1月帰朝。

エ) 永井荷風 『ふらんす物語』(岩波文庫)

明治41年8月、29歳。

(→「黄昏の地中海」から「砂漠」を経て終章「悪寒」へ(pp336-343))

唯一、岩国使節団と同じ東航。36年実業家に、と要望されて渡米、40年に本人憧れのフランスに渡る。渡米・渡仏の経験を経て41年に帰国した荷風は、日本の近代文明に対する嫌悪感をあらわにした作品を次々に発表、新しい感覚を持った作家として文名を高める。

オ) 徳富蘆花 『日本から日本へ 第一巻』(「全集刊行会」私家版)

(→pp94-101, 334-341)

大正8年(1919)2月18日～23日、51歳。

兄、蘇峰からの自立の意欲強く、明治39年エルサレムに巡礼し、ロシアにトルストイを訪ねる。警世的発言が目立ってくる。大正3年3月8日帰着、1年1ヶ月13日目。

カ)野上弥生子『欧米の旅(上)』(岩波文庫)(→pp73-79)

昭和13年10月15日～18日、53歳。

夏目漱石に師事、日本ファシズム下の転向問題を扱う『迷路』は代表作。政治と芸術の問題を『秀吉と利休』で取上げる。「欧米の旅」は雑誌社をスポンサーとする世界紀行ルポ。旅行当時は日支事変の最中であり、終盤は太平洋戦争の直前であった。

5. 番外: 秋山謙蔵「新亜細亜の胎動」(「日本版」にのみ附加)(pp359-373)

(『日本の歴史』岩波書店、昭和16年2月1日刊行)

皇紀2千6百年(昭和15)を記念し、海外各国に普及させる目的で、英・独・仏・西語に翻訳、普及をはかった。「アジア」、「インド」、「支那」などの呼称の起源など、面白い観点あるやに見受けたので、敢てコピーを提供する次第。

6. 余談ながら:

小嶋憲之「ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語——」(昭和59年1月新潮社
(→pp25-26「米欧回覧実記」との検証)

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

主要参考図書:

- ・久米邦武 編『米欧回覧実記(五)』岩波文庫
- ・水沢 周 訳・注『現代語訳 米欧回覧実記 5』(慶應義塾大学出版会)
- ・西川・松宮 編『「米欧回覧実記」を読む』法律文化社
- ・村岡・木畑 編『イギリス史 3 近現代』山川出版社
- ・ネルー・大山 聡 訳『父が子に語る 世界歴史 3』みすず書房
- ・吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波新書
- ・『世界大百科事典』平凡社
- ・梅棹・江上 編『世界歴史大辞典』(株)教育出版センター